



ベストピア Bestopia

ベストピアは
小原靖夫の
個人誌です
2013年5月号
第315号

念願5月の旅日記

恵まれたひとり旅を楽しむことができました。ひとり旅には爽快な開放感と自己防衛の緊張感の双方があり、自己責任を凝縮したスリルがあります。

久しぶりに全行程を25kgの荷物を片手でひっぱり、リュックを背負ってセルフ・マネジメントしました。楽しみながら自分の限界と向き合い、それを受け入れることも学んでいます。

第一の目的地はパリ、何時降りても迷うことなく外に出ることができないので、古賀さんに迎えをお願いし第一の不安を解消しました。数年前には荷物を受け取る道を間違えて入国してしまい、その荷物を受け取るためだけに出国し荷物をとって再度入国するという、普通の人には考えられない失敗をしています。それ以来、空港手続きにはいつも不安を抱えています。

(1)サクレクール聖堂の思い出

5月6日現地時間16:40到着(日本時間23:40)、19時にはパリ市内のホテルで馬場夫妻(バルセロナからの帰途中、パリに滞在)と夕食、博多にいる感覚でパリの夜を楽しむという一風変わった旅の始まりです。パリ在住の古賀さんは馬場夫妻と同郷同期の親しい友人、そこに私が仲間に入れていただいているわけです。

「楽しさの、時の流れは、夕沈み」疲れも忘れて、歓談の幸せ。翌朝早く馬場夫妻は帰国され、私は古賀さんの案内で戦争と平和をテーマとする「シャガール展」で時差の調整、体力に自信がついてきましたので、サクレクール教会に案内してもらいました。

20年前に滝沢陽一先生とイスラエルに遺体を受け取りに行く道中、飛行機の関係でパリに一泊することになり、その折に連れて行っていただいた思い出の場所です。

単に行ったというだけで、それ以外の記憶が殆どなく始めても同然でしたが、内陣のキリスト像は「全ての来る者を、わたしは抱く」と優しく両手をさしのべています。その境界の雰囲気は少し思い出して、あの日にテロで焼け焦げたホテルの近くを歩いて懐かしくなりました。テロの危険と隣合わせの状況にあった時にわたし達はその本場に行った訳で、よく守られたことを実感します。



(2)異常事態の訓練・警報が鳴る

疲れがどっと出てきましたので8時にはベッドに入って入睡しそうになった時、耳をつんざくようなけたたましい警告音がなり出し、跳び起き部屋の状況をチェック、何しろ自分の部屋からの異常音だったので、自分は何を失敗したのか不安でたまりませんでした。異常は発見できませんでしたので、扉を開けると全館が同じ響きの警告音、取り急ぎズボンをはき、上着を羽織って外に出る、この時、鍵は忘れず、自動反应的に持っていました。

部屋は2階でしたが厨房に近い位置にありました。外に出て階段に通じる扉を押しても開かない。ここでスッカリ慌ててしまいました。下に行くにはエレベーターしかありません。兎に角ボタンを押すとまだ動いており、やってきましたので、思いきって乗り下降ボタンを押す。ユックリしか動かないエレベーターにイライラしながら一人で降りて行きました。

フロントでは当直の男性二人が電源板とにらめっこしていますが、彼らも何も分からない。そのうちに宿泊者が階段で降りてき始め小さなホールが満員になる。20分経ってコック長のような人が怒りながらやって来る、然し彼も何もしないで去って行く。そして暫くして警告音が止まり、耳はホッとするも原因は誰にも分からない。然し誰もが冷静で、何も言わない。

ただ成り行きを見守るのみ。私も最初の質問だけで、周りの宿泊者の様子を注意深く観察する。言葉が分からないから周りの動向だけが頼り、そこで気がついたことが、パスポートと携帯電話を持ってこなかったこと。取りに戻る衝動に駆られましたが、「災いの時には、後ろを振り向くな」という知識を思い出してその場に留まりました。

そうしている間に一人の老女がエレベーターで降りてきて何か文句を言っている。どうやらこの人が原因らしいという判断で宿泊者が部屋に戻り始めました。私は若い方の男性に「大丈夫か？」と簡単に確認して部屋に戻りました。このことから学んだこと。寝る時は、何時でも外に出られる体制を準備しておくこと。着るものはキチンとタタミ着る順番において置くこと、貴重品は鞆に纏めておくこと。パスポートは常に肌身離さずをこの旅で実行してきました。

(3)ミレーからポール・シニャックへ

5月8日は午前中、モネに影響を与えたウジェーヌ・ブータン展が、数十年ぶりに大規模で行われているとのことで案内をしてもらい、「空の王者」と言われるほどに空と雲が何かを語ってくるような風景画に見惚れました。

ブータンはミレーに惹かれますが、ミレーは画家の道は険しいので諦めるように説得されたが、志を曲げず、後にモネに出会い、屋外で絵を描くことを勧め、「光のモネ」の誕生に大きな影響を与えた人であることを学びました。



午後は、今回の旅の目的の一つ、末期の膀胱癌と戦っている弟の夢を少しでも実現に近づけてやりたいと願い、モネ財団、ジベルニーのモネの家を訪問し「人は360°花に囲まれるべし」との考えを着想した原点を観て、共感しつつ、前進のための資料を入手しました。5月のジベルニーの庭は桜、チュウリップが満開でした。(詳細;パリ通信5月号)

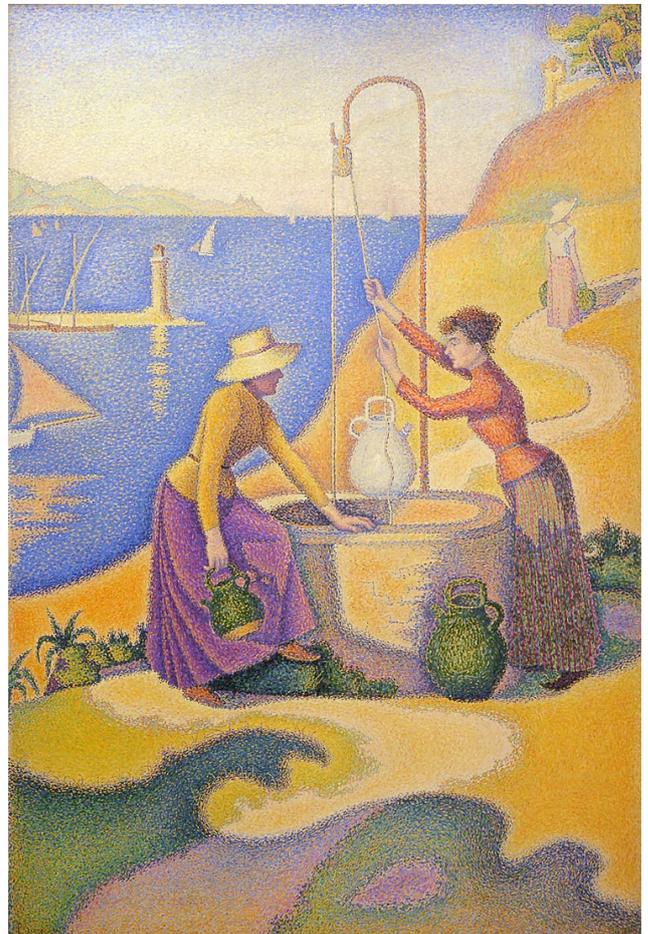
ここでも珍しい特別展、新印象派の中心人物、ポール・シニャックの点描画が世界の美術館から一同に集められて、その偉大さに驚嘆しました。

驚くべき繊細な技法が生み出す、細やかな優雅さは不思議な美の世界へ誘ってくれます。

5月9日は三度目になるバルビゾンの村ヘミレーの晩鐘の風景をもう一度見たくて、マイバスに乗り、フォンテーヌブローを訪れ、ナポレオンとローマ法王の会見の面白い絵画を見て知識を一つ増やして来ました。

古賀さんに余り頼りすぎるのも失礼と思い、マイバスの利用にしたのですが、早朝の出発にもかかわらず乗り場まで案内してくださって助かりました。本当に丁寧な対応に感謝です。

この日は夜20:00からオペラ座でパリならではのバレエを鑑賞し体調も整って愈々この旅のメインに入ります。

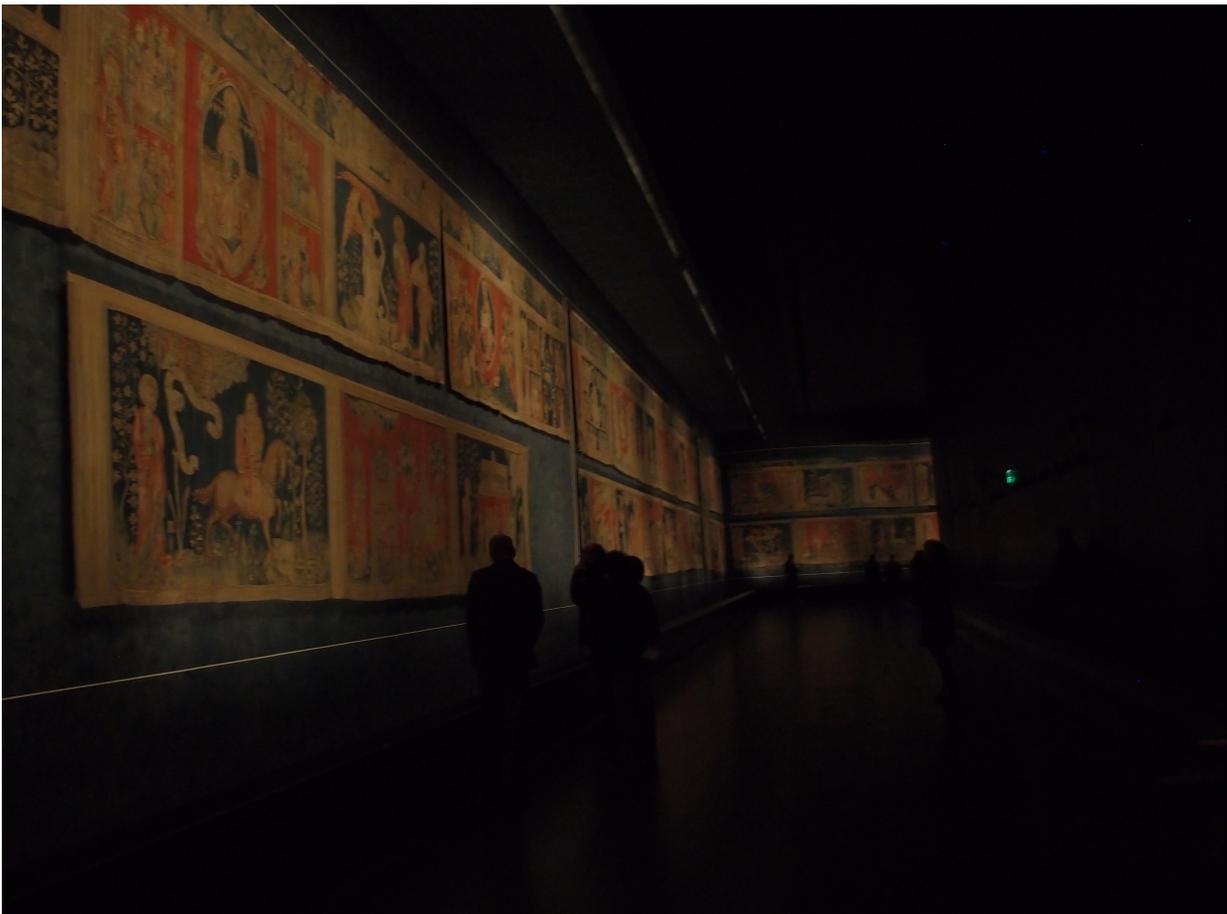


(4) 「ヨハネ黙示録」のタペストリー

5月10日、新幹線で1時間40分の距離にあるアンジェに向かう。目的は「ヨハネ黙示録」の壮大なタペストリーの見学です。

11時から長さ103mに及ぶ絵巻物の説明を古賀さんの同時通訳で学びました

100名位の人が参加しての熱心な雰囲気は薄明かりの会場を熱くします。時折、解説者が参加者に質問をします。すると子供達が一斉に答えるのです。私には難しすぎる課題に、明るく元気よく答える子供達の声が闇の中で輝くようでした。ヨハネ黙示録については、私の大きな課題です。次回から連載して、正しい理解を深めたいと考えています。いつの時代にも話題の尽きない新約聖書の最後の書簡です。専門家にとっては簡単に明瞭なことですが一般社会の理解とこれほどかけ離れているものも無いと私は考えています。神の隠されたる神秘を明らかにする黙示録は人生の終焉に向かう私にとって深い理解を必要としていることです。



内部はこのように暗く神秘的な雰囲気です。次回から詳しく紹介します。

(5)パリに花咲く日本文化

5月11日は夜遅いパリからウイーンへの移動日です。午前中に荷物を整理して午後からポール・ジャクレーの浮世絵展に案内して頂き、ここでも今まで知らなかった浮世絵の作り方、海外での評価、影響を学びました。

この年になるまでの知識の無さを恥じるばかりですが、感動が歳と共に深まることを感謝しています。



フランスではバレエの中に「かぐや姫」が定番となり、歌舞伎も愛好家が多く、浮世絵の影響はモネに遡り、俳句が受け入れられています。

若い女流の俳人、黛まどかさんは東日本大震災の被災者の心のケアに俳句をすることで活動されていますが、「まにかいのさくらがみれてうれしいな」(11歳、阿部竜成)等、被災地からの一句を編集出版されています。

その中から21句をフランス語に訳して読みあげるというコンサートを古賀さんが中心になって5月21日に開催しました。5-7-5の短文をどのようにしてフランス人に理解してもらえるように訳すか苦心していると聞きました。時間があればそれまでパリに滞在したかったのですが悔しい思いで去りました。この原稿を書いている27日当日のプログラムが届きました。

当日の収益金は東日本大震災

Concert de charité 2013

~ avec les haïkus, poèmes des sinistrés ~

~被災地からの俳句と共に~

* Message du Japon *

Madoka Mayuzumi, Poétesse

"Un moment de vie des Japonais de la région qui respectent la nature et vivent toujours avec elle après la catastrophe..."

~被災後も自然を尊び、自然と共に生きる日本人~

満開の桜に明日を疑わず

Je garde l'espoir

Le cerisier

Eclate en floraison....

Madoka Mayuzumi

の被災地に寄付されます。この大きな被災を忘れない草の根運動の一つがパリにもあります。祈りと願いが一つになれば人類共通の平和が一步前進します。「満開の桜に明日を疑わず」黛まどかさんの一句です。

(6)いよいよ本当の一人旅

5月11日深夜にウィーン西駅に隣接するモータールに到着、空港バスが玄関に到着するので実に便利、感激、荷物が苦にならないのは嬉しいことです。

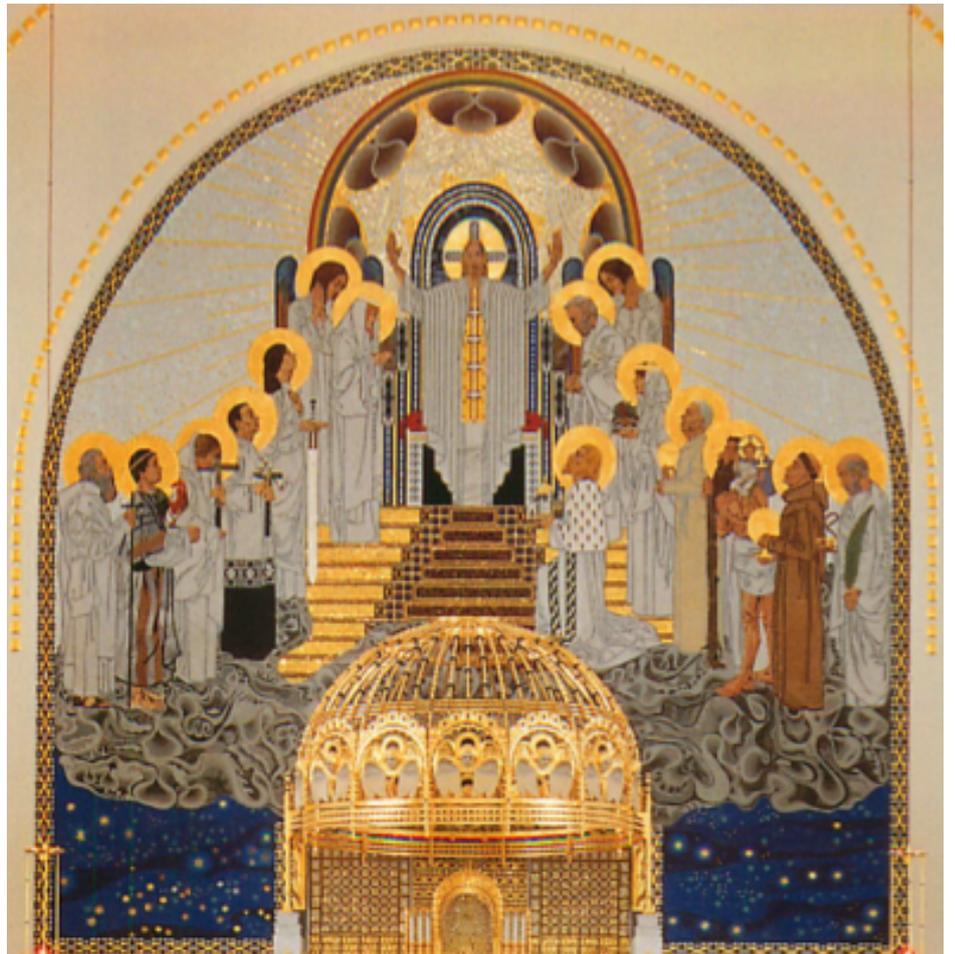
然し、寒い。布団を2枚掛けても寒い。湯船も無い。持参したホッカイロを二つ出して腰と足の位置に貼り付け眠る。どうもこの時の一瞬の寒気で風邪をひいたらしい。

5月12日ウィーンヒルハーモニーの「英雄」が旅の後半のメイン。「それ以上の贅沢はありません」と古賀さんに言われていたことを思い出して、決して当たり前ではない場所で、第二楽章の葬送行進曲に思いを込めて聴き入りました。

体力がまだあるように思えたので、アム・シュタインホフ教会の内陣とステンドグラスが

「ヨハネ黙示録」と関係があるかもしれないと感じて、バスを乗り継いで教会の麓の精神病院前で下車、雨の中病院の中にある上り坂を歩き始めて又もや寒気、しまったと思った時は遅いのが私の風邪。

兎も角、ここまで来たのだから勇気を振り絞ってたどり着きました。ここの教会は土曜日と日曜日の3時からしか公開されないのが観光客は殆どいませんが、オットー・ワーグナー達のグループが作った傑作の集積で、黄金に輝く美しさが見事です。私は過去にきたことがあるので美しさは分かっていたのですが、ヨハネ



黙示録との関係があるかもしれないと感じて再確認したかったのです。静けさとバランスの取れた建築、解りやすいステンドグラスと彫刻のハーモニーで魂が安らぐ所です。

(7) プラハの春の音楽祭

5月13日風邪と闘いながらプラハに移動、春の音楽祭のテーマ曲「我が祖国」を聴くのも永年の夢でした。現役時代5月に旅はできませんでした。ホテルに4時に到着と同時にダウン、切符が勿体無い、フロントのお嬢さんにプレゼントするかとも考えながら、出来るだけの回復手段を講じて仮眠、7時起き上がる、「よし、行くぞ」

演奏会場も美しいスメタナ音楽堂、ハープから入る第一楽章、風邪も吹き飛ばす酔域への誘い、第二楽章は有名な「モルダウ川から」地元の人々からも拍手喝采がここで起こってしまいました。第三楽章で休憩、後半も三楽章の大作はCDで聞くと疲れましたが、ここではあっという間に終わってしまいました。お隣のエレガントなご婦人と、感動を分かち合うことができたのもラッキーでした。(コンサートで隣の人と話すことは殆ど私の場合ありません)

(8) 「世界で最も美しい図書館20」 ストラホフ修道院

5月14日、昨夜の音楽で癒され体力が回復したので、ストラホフ修道院を目指してトラム22番線に挑戦、乗り場を探すのに2時間近くかかり、益々チャレンジ精神が鼓舞され閉館20分前に到着、「世界で最も美しい図書館20」に選定されている「神学の間」と「哲学の間」とその天井のフレスコ画を観て写真を撮り、戻ろうと振り返った所に、グーテンベルクの印刷機によると思われる聖書が2冊ガラスケースの中に開かれて陳列されているのを発見、近寄ってみると「ヨハネ黙示録」のところが開かれており、絵画で細かく解説されている。15世紀後半のもののようなものでした。閉館時間で追い出されるように外に出て、更

に新発見、教会の正面先頭には子羊が、その下には4人の福音書の弟子たちの像が見守っているのです。佐藤優さんが、チェコの神学の素晴らしさを強調されて



いるのを思い出しました。予期せぬ成果に満足と意欲が喚起され悦に満たされ、旧市街へトラムに乗ってたどり着きました。プラハの旧市街の広場には宗教改革の先駆者フスの銅像があります。



若者は教会ではなく市役所で結婚式を挙げる風潮になっているようです。ユダヤ人街には多くのシナゴークがあり公開されています。プラハは不思議なエネルギーのある魅力の虜になる所です。夜はドボルザークホール、演目が分からず期待だけを膨らませ

1時間前から心を弾ませましたが、ムンクの「叫び」を彷彿とさせる合唱組曲、前半の1時間でダウン、後半は諦めホテルに戻り翌日の移動に体力を温存しました

(9)旅の終わりの休養も思い出

5月15日プラハからウィーンへ戻る、飛行時間35分を半日ばかりで移動するのがひとり旅の効率の悪いところ。空港へは2時間前には到着となればその2時間前には出発です16時便利だが冷えるモーターに戻る、やはり寒いが寝るしかない。残っているホッカイロを敷き布団に貼り付け、2枚の上布団をかけて横になる。熟睡はできず、ウツラウツラと発熱と戦う。幸い空腹感は健全で16日7時の朝食を待ち望む喜びを感じつつ時間の経過を待つ。朝食を食べても外出する意欲は起こらず、ベッドにもぐる。21時明日の出発準備だけを終わらせ、可能な限りの回復手段を講じて横になる。幸い眠ることができ、又朝食が楽しみになる。

5月17日ホテルを10時にチェックアウト、帰りの飛行機はオーストリア航空、機内食が評価の高いエアラインでなかなか特典航空券は取れません。今回は幸運が重なり、初めての搭乗、席は広く快適、他社に勝るとも劣らない設備に大満足、然し冷房も超一流、3枚のブランケットを使用させてもらっても寒い、美味しいはずの食事が、暖かいものはスープだけ、あとは体が冷えるものばかり、食事の途中でギブアップ、CDは怪訝な顔をする。きつねうどんはありません。眠ると症状が悪化すると思い、必死で映画を見つづけ気を緩めることなく5月18日朝7時成田空港到着。今日一杯は体力を持たせたい、夜、妻との約束であるフラメンコが渋谷のオーチャードホールである。これは幸いなことで南足柄の自宅に戻るのではなく、渋谷のホテルに直行できる。10時にアーリーチェックインでき、冷えた体を浴槽で温める、1時間位湯船に浸かり疲れをとる。16時まで爆睡ができ、妻と合流して夕食は「鍋うどん」を目指しましたが、季節外れということでメニューから外されていました。兎も角体を温めるうどん定食、これはパリの国虎屋のスタイルそっくりであることを思いだし妻と苦笑、19時からのスペインからの有名なフラメンコも席が遠くて迫力にかけ「こんなもの」という評価でホテルに戻り翌日起き上がったのは正午少し前であった。急いでチェックアウトをし、ホテルでランチ、かくて、2週間の変化に富んだひとり旅が終わりました。

(10)旅の後も期待に感謝

5月20日は回復を急がねばならないので病院に行き診察を受ける、激しい咳等の症状を訴えると玉山先生は「体を冷やしましたね」とピタリと当てられる。私の日常生活と診察歴からの確な診断をしてくださる家庭医は有難い存在です。二日間の休養をとって博多へ、飛行機に乗る気が起こらず、新幹線で6時間、のりつぎの移動から解放されて横になれる、元気になって、今でも私を必要としてくださっている会社の期待には応えたい、この気持ちが病を乗り越える。4日間の仕事を無事終えて25日帰宅。ベストピアにはまだ向かえない。ついに26日教会礼拝には行けず、3週連続の欠席、これが一番の問題なので。言行不一致を本気で解決するために完全引退を決意したのですが、依然として心が神に真剣に向かっていない。「来週は絶対に教会に行く」その決意をもって30日から今年始

めて高岡整志会病院に招かれます。とくに賞味期限のきれている私を今も用いてくださる方々に老後を支えて頂いています。

今月いただいたお手紙には未だ返事ができていませんこと、お詫びいたします。このベストピア書き終り次第お返事申し上げます。

(11)追記;

旅の二日目の丑三つ時（日本時間10時）に携帯電話が鳴ります。現役時代はこれらの電話は必ずとって対応していましたが、今回は起き上がりれず気になりながらも無視してしまいました。7時にこの電話をチェックすると、どうも神奈川県庁かららしい事がわかり、相手の名前を必死で思い出してかけなおしました。教会のあることで昨年の10月から神奈川県承認をとる申請手続きをしており、その最終段階にありました。先方も電話の音から私が海外にいることを理解してくれましたが、速く許可が欲しい私は教会役員の協力を得て、県と交渉しました。これで大安心の旅ができたわけですが、現役時代は毎日電話に追いかけての旅でした。社会とのつながりをなくしては生きられないことを実感します。



ストラハフ修道院内に陳列されていた聖書の解説書 15世紀後半